

アジア多国籍医師団

スタンバイ

14の国・地域から

400人結集

戦火と飢餓に苦しむ難民の医療救援活動を続けている「アジア医師連絡協議会」(AMDA、菅波茂代表、本部・岡山市)は十四か国・地域の医師約四百人で「アジア多国籍医師団」を五月末にも結成する。各国に支部のネットワークを張り巡らせ、専門分野別に登録した医師たちが、被災国にただちに駆けつけ、緊急診療に当たる。フランスに本部のある「国境なき医師団」のアジア版で、年内にも内戦で三百万人の難民が救援を待っているというソマリアに派遣される。

多国籍医師団には、日本、フィリピン、タイ、インド、ネパール、韓国などアジア十三か国と香港の医師が参加。各国の医療機関に支部



菅波茂・AMDA代表

を設置し、常時二、二人の計十人が待機。支援が必要な国の最寄りの支部から医師が現地へ急行し、緊急時に即応する。

現在、AMDAに所属する医師へのアンケートを基に、過去に訪問した国や専門分野、得意な外国語などを本部のコンピュータに入力を進めている。このデータを検索し、シミュレーションしながら被災国の国情や必要な医療分野に見合った医師を派遣する。

難民の国へ急行

第1陣、年内にソマリアへ

AMDAは、今年一月、ソマリアに医師チームを派遣、現地調査などを行った。三月には、ソマリア難民救援活動に対し、郵政省の国際ボランティア貯金から一億六千万円余りの資金援助も決定し、これを活用する。

しかし、言語や文化が多様なアジアでは、一国の医療チームより複数国の方が対応しやすいうえ、地震や台風などの災害で緊急支援が必要な場合も活動しやすい。そのため、多国籍医師団を結成することにした。

AMDAによると、ソマリアは、内戦や干ばつでマラリアや結核が流行し、悲惨な状況。多国籍医師団は、難民約十万人が流入している隣国ジブチの難民キャンプで診療に当たり、北部ソマリアのハルゲサ市を中心に巡回診療を行う。

第一陣はネパールとバンラテシュ支部から、ソマリアと同じイスラム教を信仰する医師二、三人が現地入り、医療カウンセリングも行う予定。

菅波代表は「被災国にもそれぞれの宗教や慣習、言語がある。複数の国から来た医師が診療に当たれば、最もふさわしいチームを編成でき、現地の伝統医療なども理解しやすい。医薬品の入手ルートの確保も容易」と意気込んでいる。

AMDAは、岡山市で内科医院を開業している菅波さんが中心になって昭和五十九年に結成。これまでピナツボ山噴火のフィリピンやミャンマー、カンボジア

で医療活動を行って、今も



現地調査中、ソマリア難民を診察するAMDAの医師(左)